

第 49 回目 主にあって強くあれ (4)

はじめに

- 今回も前回に続いて、神が私たちに与えておられる神の武具について学びたいと思います。まずは、聖書を開きましょう。

【新改訳改訂第 3 版】エペソ人への手紙 6 章 10～15 節

- 10 終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。
- 11 悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。
- 12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。
- 13 ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。
- 14 では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、
- 15 足には平和の福音の備えをはきなさい。

● 私たちの戦いの相手は人間ではなく、「暗やみを支配する者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」つまり、目に見えない霊的な存在、すなわちサタン(悪魔)との戦いです。この戦いにおいて、私たちが勝てるものは私たちのうちには何もありません。ですから、神の武具が与えられるのです。悪魔のすべての策略に対して立ち向かうことができるためには、神が私たちに与えて下さっているすべての武具を身に着ける(完全武装)の必要があるのです。もう一度、そのリストの全体像を見ましょう。

- 神の武具として挙げられているものは七つあります。
 - (1) 真理の帯を腰に締めなさい
 - (2) 義の胸当てを着けなさい
 - (3) 平和の福音の備えを足にはきなさい
 - (4) 信仰の大盾を取りなさい
 - (5) 救いのかぶとをかぶりなさい
 - (6) 御霊の与える剣—神のことば—を受け取りなさい
 - (7) 御霊によって祈りなさい

● 私たちは神に対して多くの罪を犯して生きてきたにもかかわらず、私に代わってキリストが罪の身代わりとなってくださったことを信じてキリストとかかわりを持つなら、神の目には何ら罪を犯さなかったかのような存在として神が受け入れて下さるのです。つまり、神が私を喜びの対象として受け入れ、愛をもってかかわって下さる関係(立場、状態)を神様の方からもってくださったことを意味します。ですから、この「義を胸当て」としないう限り、敵に打ち勝つことは到底できないことを、前回、お話ししました。自分という存在を自分がどう思おうと、人がどう評価しようと、神の視点からくりかえし見直していくための戦い—これが「義の胸当てを着ける」ことです。

●さて今回は、神が私たちに備えて下さっている神の武具の第三番目です。その武具とは「**平和の福音の備えを足にはく**」ことです。

1. 「平和の福音」とは、争いにかかわる(対処する)神の武具

●6章15節の「足には平和の福音の備えをはきなさい。」ということばを見ると、そこでは「足」と「平和の福音」が結びついています。この関係がなにを意味するのかを示唆する聖書の箇所が旧約聖書の中にあります。それは、イザヤ書52章7節です。そこには次のように記されています。

「良い知らせを伝える者の足は、山々の上にあつて、なんと美しいことよ。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、『あなたの神が王となる。』とシオンに言う者の足は。」

●ここで「足の務め」が何であるのかが記されています。その務めとは、良い知らせ(Good news)「平和」「幸いな良い知らせ」「救い」を「伝える」「告げ知らせる」ということです。「伝える」とか「告げ知らせる」というのは、人に対するかかわりを示唆することばです。教会はそれを「伝道」あるいは「宣教」ということばで表わしてきました。しかし、それは単に、「良い知らせ」を「伝える」ということだけにとどまらないで、「良い知らせ」を聞いて、それを土台として生きる人々が、他の人々とのかかわりにおいて、文字通り、平和を造り出していくことを意味していると考えてよいと思います。

●神の武具が様々なかかわりにおける「平和」に関するものだとするならば、敵はその反対のことをもたらすと考えられます。つまり平和の反対は、「争い」「敵意」です。私たちの敵である悪魔(サタン)は「平和」が大嫌いです。常に、私たちの間に、人と人のかかわりの中に争いをもたらし、その争いを通して悪魔は働きます。争いを通して、私たちは相手が悪いと思ひこんでいるわけですが、霊的現実では、悪霊が国家、家庭、職場、学校、教会、そしてその中にいる人々の様々な関係を破壊しようとしているのです。

●ですから、いかなる争いの背後にもサタンの策略があるということを私たちは知っていなければなりません。なぜ私たちはそのことに気づかないのでしょうか。それは争いの当事者に「自分たちは正しい」「自分は正しくて相手は間違っている」と思わせるからです。そう思わせるのも実はサタンの策略なのですが、本当の敵がだれであるかを、サタンは悟られないように働きます。そのようにして、国と国、民族と民族、人と人一家族、職場、学校、そして教会におけるさまざまなかかわりに敵意を置き、争いの霊を与えて、かかわりを破壊しようとしているのです。争いの原因となるもの、争いの背景にあるものは、高ぶり(プライド)、人をさばく心、妬み、憎しみ、怒り、などです。

●こんな話があります。

喧嘩争いの絶えない夫婦と喧嘩一つしない家族が隣り合って住んでいました。喧嘩の絶えない夫婦の旦那さんが、ある日、不思議に思って隣の家族のご主人に、「お宅の家では家族が多いのに、なぜ喧嘩ひとつしないのですか。その秘訣を教えてください。」と頼みました。そこで家族の主人は、喧嘩の絶えない夫婦の旦那さんにこ

אגרת שאול אל האפסים

う言いました。「それはですね。あなたの家に争いが絶えないのは、二人とも善人だからですよ。私どもの家族が喧嘩しないのは、みんなが悪人になるからなのです。いいですか。たとえば、私が畳の上に置いてあった湯呑茶碗に足がふれて、その中に入っていたお茶がこぼれてしまったとします。私はすかさず「ごめん。ぼくが注意しなかったから。申し訳ない。」と謝ります。すると妻がすかさず「いいえ、私が早く片付けなかったのがいけないのです。」と。すねとその話を聞いていた母も「いいえ、私がそばにいなながら気がつかなかったのが悪いのよ。」とみんな悪人になりたがるのです。喧嘩しようにもできないわけです。

と話したそうです。

●「この湯呑、だれがこんな所に置いたんだ」と責任を追究しようものなら、大変な争いに発展することでしょうね。自分が悪いと言えない。謙遜になれない。なぜなら、そこにプライドがあるからです。プライドこそサタンの要塞です。それが私たちの心にあるならば、サタンから遣わされている「争いの霊」に勝つ見込みは私たちにありません。

●旧約聖書の中に、アブラハムの息子でイサクという人がいます。彼の特徴はどんなことが自分の身に降りかかっても決して争わないという人でした。では、彼は貧乏くじを引いたかと言うと決してそうではありません。むしろ祝福されたのです。彼は神を恐れ敬って歩んだので、神は彼を祝福しました。その祝福があまりにも大きかったので、隣国のペリシテ人たちは彼を妬んだと聖書に記されています(創世記 26 章)。それで彼らはイサクの父アブラハムの時代に掘ってあった井戸をすべて土でふさいだのです。

●現代でいうならば、嫌がらせ、陰湿ないじめです。彼らはイサクに対して「われわれのところから出て言ってくれ」とイサクに言いました。イサクはそれに対して黙ってそこを去り、別のところで、わき水の出る井戸を見つけました。しかしまた、近くにいた羊飼いたちが「この水はわれわれのものだ」と言ってイサクの羊飼いと争いました。しかしイサクは争いを避けるために、また別の井戸を掘ります。そしてそのことで、また、争いが起こりました。

●当時、水はいのちにまさるほど貴重なものであったはずですし、井戸を掘ること自体、大変な労働だったと思います。ですから、水の利権をめぐる争うのは当然のことであったかもしれません。しかし、イサクは自ら身を引いて、ほかの井戸を掘りました。・・・そうこうしているうちに、まわりの人々がイサクのところにやってきました。イサクは言いました。「なぜ、あなたがたは私のところに来たのですか。あなたがたは私を憎んで、あなたがたのところから私を追い出したではありませんか。」と。すると彼らは、「私たちは、主があなたがたとともにおられることを、はっきりと見たのです。それで私たちと平和の契約を結びたいのです。」・・・彼らが帰ったあとも、新たな井戸に水が出て、水は尽きることがなかったと聖書に書かれています。このように、イサクは決して争う必要なく、水が神から与えられ続けました。井戸が何度も埋められたにもかかわらず・・・です。まさに平和の勝利と言えます。

●なぜ、イサクは争わなかったのでしょうか。それは、自分のすべての必要は主が満たして下さると信じていたからです。イエシュアは言われました。「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。」(マタイ 5 章)と約束されました。「心が柔和」であるとは「争いをしない」ということです。たとえ自分が貧乏くじを引

אגרת שאול אל האפסים

いたように思えたとしても、争うことをしないならば、地を受け継ぐというのです。つまり、地上において多くのものを受けるといことです。逆に、争う心は、多くのものを失ってしまうといことです。

●このような争いの背景にあるものは、高ぶり(プライド)、人をさばく心、妬み、憎しみ、怒りです。パウロはエペソ人への手紙の中で、すでに怒りの感情について記しています。

4:26 怒っても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません。

4:27 悪魔に機会を与えないようにしなさい。

●怒ること自体、即、悪であるとパウロは言っています。しかし、怒りを次の日(ユダヤ人であるパウロは、おそらく日が暮れる、イコール「次の日」と考えたかもしれません)まで持ち越そうとするなら、悪魔がその怒りを通して働く機会となると警告しています。怒りの感情をコントロールすることはとても難しいことでもあります。もし私たちが怒りの感情を治めることができるなら、それは町を攻め取る者に勝ると言っています。箴言に怒りについての記述がありますので、少し、覗いてみましょう。

(1) 16章32節

「怒りをおそくする者は勇士にまさり、自分の心を治める者は町を攻め取る者にまさる。」

(2) 15章18節

「激しやすい者は争いを引き起こし、怒りをおそくする者はいさかいを静める。」

(3) 15章1節

「柔らかな答えは憤りを静める。しかし激しいことばは怒りを引き起こす。」

●新約聖書では、「愛する兄弟たち。・・・だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。人の怒りは、神の義を実現するものではありません(ヤコブ書1章19,20節)とあります。このように、短気で、怒りやすいことは神とのかかわり、あるいはさまざまなかかわりを築く上で妨げとなることを警告しています。

2. 「平和の福音の備え」を足にはく生き方とは・・・

●そこで、「争い」に働く敵の策略に対して私たちに与えられている神の武具に目を向けてみることにしたいと思います。それは「平和の福音の備え」をいつも足にはいているといことです。しかしそれはいったい具体的にどういことなのでしょう。実は、エペソ書を書いた使徒パウロが、すでにこのことを2章で記しています。

エペソ人への手紙2章14～16節

14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、

15 ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とはさまざまの規定から成り立っている戒めの律法 なのです。

このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、

אגרת שאול אל האפסים

16 また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。

●このテキストを要約すると、

- (1) キリストこそ私たちの平和
- (2) キリストが平和を実現する
- (3) キリストは十字架によって「敵意」を葬り、一つのからだにおいて神と和解させた

●ここにはすごいことが書かれているのです。つまり、私たちが争いから解放される道は、キリストの十字架を見上げることにしかありません。実は、神の民であるユダヤ人と異邦人の間にもこの「敵意」が存在していました。ユダヤ人はかつて神のみこころに従わなかった結果、バビロン捕囚という亡国の憂き目をみます。しかしそこから解放されて自分たちの国に戻ってからも異国の支配は四百年間続きました。そのプロセスの中で、次第に、自分たちの存在は他の人々とは異なる聖なる民だという自己意識を強めることによって、自分たちの存在のアイデンティティを持つようになりました。具体的には、自分たちの神殿の中に「異邦人の庭」－それは神殿の一番外側にある－というものを作って、それ以上、異邦人が中に入らないよう禁じました。もし「ユダヤ人の庭」に入るならば「殺す」という立ち入り禁止の仕切りでした。これもユダヤ人が長い間、異邦人の支配によって搾取されてきた歴史の中で培われた自己防衛本能から作りだされたものと言えます。「異邦人の庭」はユダヤ人と異邦人との間に存在する「敵意」の象徴のひとつの例です。

●聖書のテキストでは「敵意とは、さまざまな規定からなっている戒めの律法」となっています。もともと神の戒めである律法は、神と人のあるべき関係を築くために神が与えたものでした。いわば救いの道を示した良いものなのです。その良い律法のどこに敵意が入り込んだのかというと、こうです。ユダヤ人は異邦人と自分たちが違う存在、自分たちが特別な存在だと意識するために、他の民は犬(軽蔑用語)であり、全く人間とはほど遠い存在だと考えるようになっていったのです。一方、「犬」呼ばわりされた異邦人は異邦人で、ユダヤ人を憎むようになってしまったのです。ユダヤ民族の迫害の歴史は、ある意味で、神の律法を「隔ての中垣」とすることで、自分たちは優秀な民族だと思いこみ、そこに敵意を呼びこんでしまったのです。もともと神の戒めは神の賜物として与えられたものです。神の救いをあかしするものとして与えられたものであった戒めが、ユダヤ人の自己防衛的感情によって、異邦人たちと自分たちとの「隔ての壁」とし、そこに敵意を作ってしまったのです。

●こうした敵意を廃棄された方がイエシュアです。どのように廃棄されたのでしょうか。救いの道は「キリストを信じるだけで十分」としたことで、戒めのもつ価値がなくなってしまったということです。つまり、ユダヤ人が異邦人と異なるという隔ての壁が崩れてしまったのです。その壁がくずれることによって、敵意の入り込む隙がなくなってしまったのです。ここに「キリストこそ私たちの平和です」という宣言が確立します。

●キリストなしには、私たちはいつも自分の隔ての壁をつくる弱い存在です。家柄があるとか、学歴があるとか、富があるとか、能力があるとか、これこれのことができるとか・・・。そうしたものを「隔ての壁」にすることによって、人と人の間に敵意を呼びこんでいるばかりか、神との間にも敵意を呼びこんでいるのです。神の前にはそのようなものは必要ありません。そのようなもので受け入れられることはありませんし、そうした壁を作るこ

אגרת שאול אל האפסים

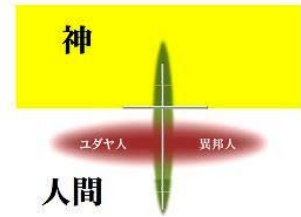
とで、むしろ神に敵対するものとなります。

●神の敵であるサタンは、いつも敵意を呼びこむものを私たちに作らせようとします。敵意のあるところには争いが生じます。争いのあるところには、常に、反抗心と混乱とあらゆる悪が存在します。サタンの支配しやすい状態を作り出すのです。ですから、私たちは争いを、争いの霊を自分の生活から締め出すことを決意しなければなりません。イサクのように。

●ユダヤ人と異邦人との敵意はすべての敵意のたとえです。

敵意を取り除くキリストの十字架のメッセージ、

- (1) そこには、「隔ての壁を作る」人間の罪の姿、敵意が最もむき出しにされたところです。
- (2) そこには、敵意に対する神の赦しがあります。
- (3) そこには、キリストによってすべてのものが和解(平和)する道があります。
—神との和解、人との和解、そして自分との和解—



●イエシュアの生涯を見ると、争いの構えを見せるパリサイ人や律法学者たちに対して、争いで仕返すことはありませんでした。イエシュアに対する争いをあらわにした者たちの前でも、イエシュアは自制心を働かせました。争いを自分から締め出すこと、神の御手にゆだねること、傷つけられてもすばやく赦し、怒るのに遅く、忍耐をもって人に対して親切にかかわりつづけること。そのようにして平和を私たちのうちに創造してくださる方はキリストの他にはいません。私たちの内にこのキリストなしには平和を作り出すことはできないのです。「キリストこそ私たちの平和です」—あなたはこのことを信じますか。このことを信じるのが、今回の第三の武具である「平和の福音の備えを足にはく」ということなのです。

最後に

●争いの絶えない私たちに真の平和を与えるために、神の御子イエシュアはこの世に遣わされました。この方は「平和の君—平和のプリンス」と呼ばれます。この方と私たちがしっかりと結び合わされることなくして、私たちの心にある敵意から逃れることはできません。平和を実現することはできません。もう一度、イエシュアの十字架を見上げて、私たちの敵意を葬ることができますように。そして平和を作り出す者にしてくださいと祈りましょう。